シリーズ 元気です！ ㉛

スローライフで環境に寄り添う

―鳥取環境大学ヤギ部―

きっかけは先生のひとこと

約三年半前、鳥取市二番目の大学として誕生し、来年には第一期の卒業生を送り出す環境大、この大学の誕生とともにスタートを切ったという鳥取環境大学「ヤギ部」、ネーミングからしてナチュラルかつシンプル。全国的にも酪農畜産系の大学を除けば、例のないユニークな存在とのこと。二〇〇一年四月の開学と同時に同好会としてスタートし、活動が認められ一年後には部に昇格している。このヤギ部、誰の発案によるものか。当時を知るのは、同大学四回生で前部長の米原陽子（よねはらようこ）さん（広島県出身）、顧問の先生の「環境問題を考えるうえでのツールの一つになるのではないか」の一言。確かに思いつきとも言えるものであるが、それに興味を抱き前向きに取り組む学生は、発足当初の十人から、三回生の溝部進也（みぞべしんや）部長（東京都出身）、そして誘われるままに入部したという二回生の山本真史（やまもとまさし）副部長（広島県出身）を中心に、今や三十人近くにまでふくれあがっている。

ヤギ部のみなさん
（左から溝部部長、山本副部長、米原前部長、安ヶ平さん）

みんなのアイドル〝メ～ニング娘。〟

現在、ヤギ部ではヤギを二頭飼っている。そのうち大型で古参の〝ヤギこ〟は大山のトムソーヤ牧場からやってきた三歳半、愛想は良いが少々乱暴、もう一頭の食用種のしばヤギの〝しばこ〟は名古屋大学農学部から今年三月に研究用として譲り受け、現在九か月、小型でかわいいのだがいつも草を食べてばかりで少々愛想がない、言うまでもなく二頭とも雌である。ここで、なぜヤギなのか？である。ヤギという生き物、大量となれば砂漠化の原因ともなるのだが、そうでない限り、その糞（ふん）はにおいも少なく荒れ地を農地へ変える肥料に、また、人間と食糧を競合することもなく、飼うに当たってのコストは最小限、環境に極めて負荷の少ない動物である。そしてポピュラーな割に野性味を残している動物とあって、アニマルセラピーにも好適。現在、東郡家の休耕田の除草作業のほか、民家やNPO団体からの派遣依頼も多いとか。さらに、食用としての繁殖も考えているとのこと。こう語るのは一回生の安ヶ平志野（やすがひらしの）さん（岩手県出身）、動物が好きで世話だけと思って入部したのであるが、今では〝しばこ〟の種付けを企画するまでに、ヤギ部のホープと呼ばれる存在である。

いつもカメラ目線の
人なつっこい“ヤギこ”

考え方も自然体

当面の取り組みであるが、学内の畑の維持・管理や学外への派遣除草の他に、現在、カレンダー、Tシャツなどの関連グッズを考案中とのこと、これを担当するのはやぎグッズ課というセクションであるが、このほかにも繁殖を企画する子づくり課やプロモーションビデオを作成するムービー課、ファンの拡大を進めるやぎっ子大増殖など全部で七つの課がある。最後に、ヤギ部の究極の目標があれば と問えば、「特に方向性を定めないし、限定する必要もないと考える。」と部長の溝部さん。「あえて言えばアニマルセラピーをもっと普及させ街に溶け込ませること」また、自身の研究テーマとして取り上げないか？の問いには、「個人的都合により活動が限定されるようではいけない。活動内容は、そのときの状況に応じ自然と決まっていくもの」と、押しつけがましい理屈や騒々しいスローガンから入って行かないのである。これぞまさしく環境への配慮、柔軟で穏やかだ。そんな話を聞いているときに、どこからか「メエー」の声、おもむろにケータイを取り出す溝部部長、さきほどの声の正体は着信音だったようだ。なにからなにまでヤギなのだ。

除草？にはげむ“しばこ”、
柵（さく）は、全て部員の手づくり